

「無知は罪なり、知は空虚なり、英知持つもの英雄なり。」と言ったのは、古代ギリシャの哲学者ソクラテスだった。対談集を読みながら、そういえばと思い出したのは、この哲学の父のことだと、少し前に読んだある記事。

その記事によると、入社一年半が経過した若手社員に「自信がない」ポイントについて質問したところ、「ビジネス知識」が68%で最多、また仕事をしていて、自分の知識不足を感じることはあるのかとの問いに対しては、92%が「知識不足を感じる」と回答したそうだ。

インターネットをはじめ様々なメディアを通じて、膨大な量の情報に触れられる、いや晒されている今、なぜ私たちは自分が無知だと悩むのだろうか。地球の反対側で起きた出来事だって、一瞬で、詳細に音や色まで感じる事が出来るのに。そしてそのような情報を毎日毎日受け取っているのに。それとも、と思う。この情報社会が、逆に私たちは無知だと感じさせているのではないか。日々更新される情報を、全て把握することなんてできない。そんなことは誰にもできないのに、たまたま自分が知らないことを指摘されると恥ずかしいと感じてしまう。

では今、私たちが無知であることは罪ではなく、仕方のないことなのだろうか。これは、私対談を読み進めていく中で湧いてきた疑問だ。「知識人と大衆」と題した部分の冒頭、池田先生は「今日に至るまで人間は知識人と大衆を分けてきたが、現代文明においてその伝統を踏襲することは、もはや正しくないのではないか。」という問題提起をされている。ここで私は、現代社会においてどのような人が知識人だと思われているか、改めて考えてみた。まず、学問を探究すること、またそれを人に教えることを仕事にしている人がいる。研究者と、学校の先生、大学の教員をしている人だ。そして政治家、医師、作家、と他にも挙げられるが、このような人々が主に知識人として見られていると分かった。

さて、今の日本ではこれら知識人と大衆は隔絶しているのだろうか。私は最初、していないと思った。理由は先に触れたように、今が情報社会だからだ。大衆だってかなり知識を持つようになったじゃないか、と。しかしよく考えてみると、今ほど知識人の意見に人々が反応し、振り回されていることはないのではないかと考えてくる。なぜなら、やはり情報社会だから。買い物をするときや、進路を決めるとき、私たちはいつも多すぎる選択肢と、それにまつわる情報に囲まれている。しかもその情報の中には、ネット上に書かれた口コミなど、信頼性にかけるものだってある。そんな時、私たちが頼るのは専門家であり、知識人の意見なのだ。これだけなら知識人と大衆が隔絶していることにはならないが、私は今論争を巻き起こしている安全保障関連法案をめぐる反応に、知識人と大衆が対立して

いるような印象を受けた。たとえばツイッターで、知識人と言われる人が、デモをしている若者を勉強不足だと馬鹿にするような発言をしている。一方で、専門化が必死に説明しても、よく分からないからと聞く耳を持たず、イメージや周りの意見に流されているような人も多い。もちろん、反対、賛成どちらの意見にも、会議を開き報告書をまとめたりして、使命感を持って活動している知識人と、一生懸命勉強して、自分の考えを持とうとしている人はいるけど。

私はこれを考えた時、今もまだ知識人と大衆はお互いを疎外していると思った。そしてその原因は、今私たちが抱えている問題が難しすぎるからなのかもしれない。私は今年、国立環境研究所に行って、専門家の方にお話を伺う機会を頂いた。以前から環境問題に興味があったので、またとないチャンスだと思い、ずっと気になっていたことを質問した。それは、「地球温暖化は起きていなくて、近年の温度上昇は、周期的に起きる自然な気候変動のせいだと言う人がいるが、実際はどうなのか」ということだった。私の質問に答えてくださった方は、「そのような温暖化懐疑説を唱える人はきちんと気候や温室効果ガスについて勉強していない人だ。少なくとも、温室効果ガスを研究している人の中に、懐疑論を唱えている人はいない。」と言った。この日まで本や論文を読んで勉強したけれど、その情報を発信している人がどのような立場にいて、何を専門としているのかにもっと注意すべきだった。しかし、そこまでの時間と熱意のある人が、学者以外にいったいどれくらいいるだろう。私は、今の時代、正しいことを知るのがいかに難しいことかと思ってしまった。

人類が今直面している課題は、グローバル化によって複雑さを増している。正しい、間違っているとか、賛成、反対では割り切れないものばかりだ。また、対談の中でも触れられているように、問題が大きくなるにつれて学問がどんどん専門化していく。専門化が進めば、一つ一つの問題をより深く学べるが、短い時間で総合的に知ることが難しくなる。そうなれば、知識人にとっても説明するのが億劫になるし、大衆は理解し、自分の意見を持とうと思えばかなり努力しなければいけない。これが、知識人と大衆の隔絶に繋がっていると思う。

では、知識人と大衆が隔絶するとどうなるのだろう。これについてトインビー博士は「一般的にあって、知識人と大衆の隔絶が生じるとき、知識人としては、人生の普遍的な現実問題との接触を失いやすいものです。一方、大衆のほうは、すべての人が能力に応じて最大限に教授すべき知的教養というものを、そうしたさいに失うことが多いものです。」と述べている。これを読んで感じたのは、知識人と大衆が隔絶すると、知識人は閉鎖的になり大衆は理解しようとするのをやめ、それがまた隔絶に繋がるということだ。池田先生はこのように思い、「知識人と大衆の隔絶、反目を見ると、私は、これは人間社会にとってま

ことに不幸なことであり、何としてもこのギャップを埋める努力がなされなければならないと思うのです。」と言われたのではないか。

このギャップを埋めるために、私たちがすべきことはなんだろう。私は、あのソクラテスのことばを思い返してみる。無知は罪か、仕方のないことか。ソクラテスは「無知の知」で有名だった。彼は、知らないのに知っていると思っている人より、知らないことを知らないと思っている人のほうが優れていると考え、こう言っていた。「知らないものを知っていると思うということが、どうして不届きな無知でないことがありますでしょうか。」つまり、彼がいう「無知は罪」の「無知」とは、単に知識が欠けていることではなく、それをなんとも思わないことなのかもしれない。例えば戦争のこと。小さい頃からずっと学んできた。もう充分知っているのに、と心のどこかで思ってしまうことがある。けれど、私が知っていることなんて本当はほんの一部なのだろう。ここで、まだ知らないことがあるのではないかという謙虚さを失えば、私はいつか、誰かを傷つけるかもしれない。

では知識を詰め込めばいいのかというと、それは違う。たとえ私が環境のことをいくら熱心に学んだとしても、それを日々の生活で生かさず、「暑いわー」と言いながらクーラーの設定温度を下げているようでは意味がない。これこそ、「知は空虚」だ。

また、何を知っているか、ということも重要だと思う。初めに紹介した記事では、情報収集の現状についても調査していた。それによると、「自分が興味・関心のある情報しか収集できていない」と答えた人は全体の 84%にのぼり、情報収集に偏りがある傾向が強いことが分かったようだ。さらに、普段の情報集源としては、「Web」を活用している人が 81%でトップ。一方、「新聞」を毎日チェックしている人は 17%ととどまった。私は、ここに情報収集が偏る原因があると思う。インターネットを使って情報を得るには、「検索」しなければならない、興味を持たないこと、難しそうなことを知る機会が減ってしまう。一方、新聞を全部読むことで、押さえるべき情報を効率よく得ることができるし、今まで関心がなかったことをおもしろいと思えるかもしれない。

「英知持つもの」とは、このように探究心を持ち続け、かつ、得た知識を生かす知恵を持った人なのだろう。知識人と大衆の隔絶を無くすため、地球的課題を解決するため、そしてより良い、平和な社会を築くためには、知識人だけでも、大衆だけでもいけない。すべての人が「英知もつ英雄」でなければならない。

また、トインビー博士は、現代を「全体的な視野を必要とする時代」だと言った。知識人も、大衆も、お互いに尊敬し、強く連携していかなければ、全体的な視野など持つことはできない。

改めて、私たちがすべきことはなんだろう。池田先生はこう仰っている。「知識人である

にせよ大衆であるにせよ、今日最も要請されるのは、世の不正を見て何らかの変革をめざそうとする姿勢であると思います。われわれは、まず大前提として、知識人も大衆もともに同じ人間であるという原点に立ち戻り、歴史を真に動かすものは、特定の階級やグループではなく、人間一人一人であるという自覚をもたなければなりません。」

私たちがすべきこと。それは、知識人としてでも、大衆としてでもなく、人間として生きることだ。